



(仙台)

市川橋遺跡は、特別史跡多賀城跡の西方から南面にかけての水田部分に位置する。多賀城跡の西側を南流する砂押川が形成した自然堤防上、及び海拔二～四mの低湿地に立地し、南北約一・九km、東西約〇・八kmの広さをもつ。本遺跡の本

宮城・市川橋遺跡

いちかわばし

- 1 所在地 一 宮城県多賀城市高崎字水入
二 同市市川字伏石
- 2 調査期間 一 一九八九年(平一)五月～六月
二 一九九二年七月～十一月
- 3 発掘機関 多賀城市埋蔵文化財調査センター
- 4 調査担当者 一 瀧口 卓、二 石本 敬
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良・平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

格的な調査は一九七九年から開始され、隣接する山王・高崎遺跡などとともに、平安時代に多賀城南面一帯に展開した都市の在り方を解明する上で、貴重な成果を挙げている。

一 第八次調査

この調査区は宅地造成・住宅建設に伴う事前調査を実施した箇所である。

検出遺構は掘立柱建物四棟、溝二九条、水田、整地層などで、全て古代に属する。

整地層は一〇層に細分される。この付近は東にある高崎丘陵の裾部から低湿地に移行する箇所、ここに整地地業を行ない、居住空間を広げて建物などを建てていることがわかった。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶・壺・盤・甑、須恵系土器杯、円面硯、風字硯、緑釉陶器、灰釉陶器、軒丸瓦、木製品(木簡、曲物蓋板・底板、盤)、土製竈、墨書土器などが出土している。

木簡は一〇世紀前半の溝から出土した。多賀城南面では東西・南北両方向の道路が各々数条発見され、方格地割りを形成しているが、この溝はその内でもメインストリートにあたる東西大路の南側溝にあたる可能性の高いものである(前頁の「多賀城南面の街並み」地図参照)。

二 第一〇次調査

本地区は宅地造成に伴う事前調査を実施した箇所である。

発見された遺構は、掘立柱建物八棟、竪穴住居五棟、井戸一基、道路、堀、水田、溝などである。各遺構の時期は古墳時代から近世・現代にまでわたるが、奈良・平安時代のものが中心となる。

調査区内では、多賀城南面の方格地割りを形成する道路のうち、東西道路・南北道路の一部を発見した。時期は一〇世紀前半である。遺物は土師器杯・甕・鉢・甗、須恵器杯・高台付杯・蓋・稜碗・壺、須恵系土器杯、灰釉陶器、風字硯、瓦、木簡、木製品、鉄製品などが出土している。

木簡は西側調査区の井戸SE三四から大量の削屑とともに出土した。井戸の年代は奈良・平安時代である。

8 木簡の釈文・内容

一 第八次調査

(1) 「安達」(木口)

表(222)×表24 065

下端がわずかに欠けてはいるが、概ね原形を留めている。棒状で、上端の木口に「安達」と記されている。

この木簡は文書を巻く軸として使用された可能性がある。「安達」の記載から陸奥国安達郡関連の文書を保管するためのものだったのであろう。但し、文書の軸は一般に一尺前後の長さがあり、この木簡はそれに比べて短いということが不審な点として残る。

安達郡が成立したのは延喜六年(九〇六)正月二〇日(「延喜式」

民部上頭註)のことで、安積郡の一部を新郡として分離、独立させたものである。範囲は現在の福島県二本松市を中心とした一帯で、同市杉田町に所在する郡山台遺跡が、七次にわたる発掘調査の結果、郡家と推定されている。

二 第一〇次調査

(2) 大田マ子 ☐赤 ☐麻

足 矢田石足

061

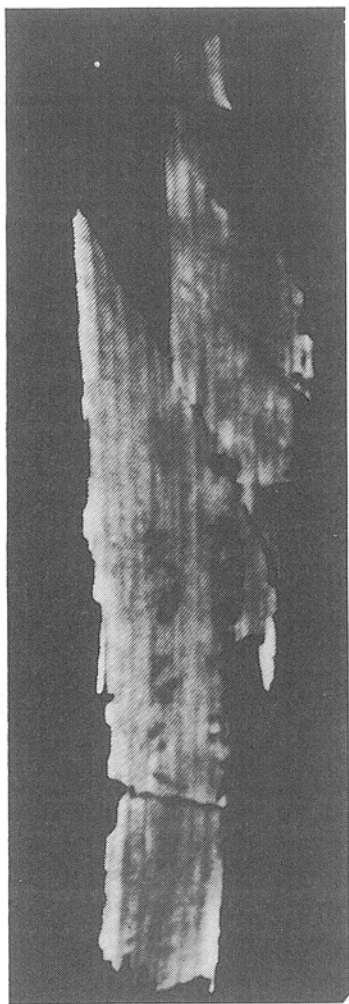
削屑で、全容は知り得ないが歴名と思われる。大田部、矢田ともに上野国の氏か。

9 関係文献

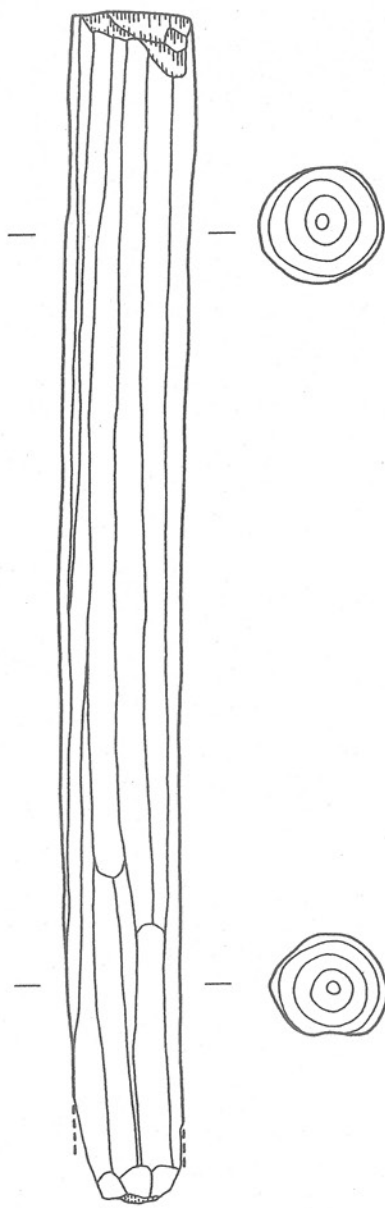
多賀城市埋蔵文化財調査センター『市川橋遺跡―平成元年度発掘調査報告書―』(一九九〇年)

同『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報』七(一九九四年)

(滝川ちかこ)



(2)



(1)